浅田宗伯　医案①

沼田侯土岐氏（飯倉伊賀守の弟なり）一旦幕府参政の職を奉せしを以て、戊申の役に官軍城下に迫り、既に攻戦に及ばんとす。因て勉強し勤王の盟をなし、兵解くの後、忽然として言語蹇渋、半身不遂、腹裏拘急、時々鬱冒、人事を省せず。精神快々として楽まず。百治効なく都下に出て治を乞う。余診して曰く。熱癱癇なり。前医徒らに偏枯として烏附の剤を投ず。故に治を得ずと。因て柴胡竜骨牡蠣湯に大黄鉛丹を去り、芍薬釣藤羚羊角甘草を加えて与うること数日にして、鬱冒止み、腹裏動悸静かに、手足稍舒暢を得たり。但神気不爽、気逆甚しきを以て、四逆散合強神湯を与え、牛黄清心丸を兼用して、精神稍爽に、手足運輸を得、侍婢に扶けられて庭中を歩するに至る。後閑栖を墨水の澨にトし、余年を楽しむと云う。